

巻頭言

特集 音楽と科学

KEIO SFC JOURNAL Vol.20 No.2 特集編集委員

藤井 進也

慶應義塾大学環境情報学部准教授

「音楽と科学」特集号に関われたことを、心から嬉しく誇りに思う。

「音楽と科学」という言葉を聴いた時、あなたは一体何をイメージするだろうか。両者は分断しており、両者の結びつきをイメージすることは不自然だろうか。それとも、両者の結びつきは自然で、両者が分断している様子をイメージする方がむしろ困難だろうか。

学生時代、音楽と科学の分断に、心悩まされた経験がある。当時ドラマーとして、京都のジャズバーで演奏に明け暮れていた。演奏の中で学んだ感覚を科学研究の場に持ち込んだ時、「主観的である」「客観的でない」「再現性がない」「科学的ではない」という言葉を何度も耳にした。「音楽」と「科学」が結びつくことは難しいのではないか、「音楽」と「科学」は排他的な関係にあるのではないか、「音楽家」と「科学者」は矛盾した存在ではないか、「音楽」とは、「科学」とは、「研究」とは一体何か、何度も自問自答したことを鮮明に覚えている。

自問自答を繰り返す中、多くの人々に出会い、考え、実践し、研究する機会を頂いた。私が出会った敬愛する音楽家、科学者、研究者は皆、純粋な心で人間や物事の真理に向き合い、探究し、表現し続けていた。その真摯な姿を眼の当たりにしていると、音楽の実践と科学の探究は、決して相対する関係ではなく、音楽家も研究者もどちらも同一の真を究めようとする、同志のような存在であることに気がついた。その時、悩んでいた心に光が射し込み、眼前が明るくなるような気がした。

一方で、この世の中を俯瞰していると、特に国内において、まだまだ音楽と科学が分断しているように感じることも事実である。これまでの壁を超越

し、音楽と科学が融合するとき、いかに豊かな世界が生まれる可能性があるのか、音楽と科学をテーマとした学術記事が必要であると感じていた時、幸運にも本特集号の編集を提案する機会を頂戴することができた。2019年の秋である。

その後、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行拡大により、世界は一変した。感染症拡大により、物理的な密集状態を忌避するため、対面型の音楽ライブ公演やイベント等は中止を余儀無くされ、今も尚、音楽業界は甚大な影響を受けている。デジタル化・オンライン化・リモート化・AI化は急速に進んでおり、音楽産業の構造は大きく変化しつつある。世界は感染症問題に加え、自然破壊、環境汚染、異常気象、資源枯渇、食糧不足など、地球規模での問題を数多く抱えている状況にある。

音楽と科学の分断だと嘆いている暇はない。今こそ全地球人が一丸となって、音楽と科学が持つ本質的な価値や力を見つめ直す必要がある。本特集号には、音楽と科学、そして地球の未来を切り拓くためのヒントが満ち溢れている。地球内の対立に向きがちな意識を、一本化・一体化し、地球人としての結束を深く強くするために、ぜひ本特集号をヒントにいただけたら幸いである。

本特集号の編集委員として、一つお願いがある。ぜひ、音楽アルバムを聴くように、本特集号を楽しんでいただきたい。お気に入りの曲を見つけたり、アルバム全体の流れを楽しんだり、様々な楽しみ方で、音楽を聴くように本書を味わって頂けたら幸いである。ある音楽アルバムが人の心を潤すように、本特集号が人の心を潤す作品になればと心から願っている。もし、学生時代の悩んでいた自分に出会うことができれば、迷わず本特集号をプレゼントするだろう。

最後に、本特集号編集の機会を与えていただいた慶應 SFC 学会、KEIO SFC JOURNAL 編集委員会、学会事務局の皆様、そして、ご寄稿いただいた著者の皆様に、心より深く感謝申し上げます、本特集号の巻頭言とする。「音楽と科学」の世界によろこそ！